

インド紀行 2023



2023年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

旅行会社のパッケージツアーで妻とインドに行ってきた。ツアー参加者は16人、日本からの添乗員は同行せずに現地ガイドが全てを仕切るツアーだった。インドは「多様性をバラバラなまま包みこむ」と聞いていたが、まさしくそれを体験する旅になった。

第一章 間一髪

■旅行断念か

私は神奈川県の相鉄線沿線に住んでいる。今回のインド旅行は羽田空港出発なので、私と妻は相鉄線に乗り終点の横浜駅で降り、羽田空港行きの京急線に乗り換えた。

しかし電車に乗ったその瞬間、顔面蒼白になることが発覚した。

朝、家を出る時には小さなカバンを持って出たが、何とそれが無い。相鉄線の電車の網棚に忘れてきたことに気が付いた。そしてその中にはパスポートが入っているからとんでもない事態だ。私たちはドアが閉まる直前に電車を降り、すぐに相鉄の駅に向かった。

横浜駅の中央コンコースを走り抜けて相鉄の窓口に駆け込み、駅員に事情を話した。しかし興奮していて私の説明は全く的を外している。自分でそう感じるのだから相当に焦っていたのだろう。それでも何とか〇〇時〇〇分の電車の網棚にカバンを忘れたこと、そのカバンの特徴と中にパスポートが入っていることを伝えた。

しかし私たちが乗ってきた電車は既に折り返して発車しており、この時点ではまだ忘れ物の連絡は入っていなかった。

窓口の駅員は各駅に電話連絡をしてくれた。そして捜索が始まった。

羽田空港の集合時間まではあと1時間30分、私の脳裏には“旅行断念”の言葉も浮かんでくる始末だ。

第二章 強烈なインド

■インドの多様性

間一髪の騒動の末、無事に出発し、飛行機はインドに到着した。空港に降り立つと夕方なのに気温は 35℃もある。迎えに来てくれていた地元ガイドに案内されバスに乗り込んだ。

ガイドはディーブさん、日本語が上手い。驚くべきことに彼は日本での滞在経験がなく、日本語はデリー大学で学んだだけだという。私は彼の語学習得能力に驚いたが、名門デリー大学を出ていることにさらに驚いた。日本ならば東京大学卒の観光ガイドに会ったようなものだ。

その彼のアシスタントはシャルマさん、この人も日本語を話す。どこで学んだかは聞いていないが、大学卒のエリートかもしれない。そして当然バスの運転手、さらにその助手もいる。

乗客は 16 人なのに現地スタッフが 4 人、日本では考えられないがインドでは当たり前らしい。

バスは古いがエアコンがついている。なぜか運転席と乗客席は仕切られており乗客席はエアコンで快適だが、運転席は暑くて窓を開けている。不思議なことに乗客の各席の横には小型扇風機がついている。ツアー客の 1 人が「この扇風機は何でしょうね？」と聞いてくる始末だ。

そして IT 先進国だからか、古いバスなのに Wi-Fi が装備されているのも驚きだ。

この不思議なバスに名門大学卒のガイド、“何でもあり”という状態だ。

私は「インドは多様性をバラバラなまま包みこむ」という言葉を思い出した。バスの中だけでもそれを感じるのだから、これから始まるインド旅行では一体何があるのだろうか。

■喧噪の世界

空港の外に出ると、驚くほどの交通渋滞で喧噪の世界だ。とにかく車の数がとんでもなく多い。乗用車以外に路線バス、そして三輪タクシーが多い。その隙間に多数のオートバイが割り込んでいる。



【交通渋滞の市街地】

余談になるが、三輪タクシーはタイでは“トゥクトゥク”と呼ばれているが、ここインドでは“オート・リキシャー”と呼ばれている。その“リキシャー”の語源は“人力車”というから信じがたい。日本との妙な繋がりに感心してしまう。

走っている車は日本のスズキが圧倒的に多い、次は韓国のヒュンダイだろう。トヨタもホンダもそれなりに走っている。車は左側通行、日本と同じ右ハンドルなので違和感がない。イギリス統治時代に交通ルールもイギリス流が導入されたためだ。

■人口 14 億人、そして貧富の差

街を歩く人、露天で物を売る人、木陰で休む人、とにかく人が多い。信号待ちの車に近づいてくる物売りも多い。言葉は悪いが、うようよ湧いて出てくる。これが人口世界 1 位、14 億人の国の実態なのだろう。

それにしても若い人が多いように感じる。国連の統計で世界各国の国民の平均年齢が報告されており、日本は 48 才、インドは 28 才と驚くべき数字になっている。

街で見かけた多くの人々は決して裕福と言えない恰好をしており、裸足の人もいる。そうかと思えば一部の人は高級車に乗っているから、貧富の差は相当に大きい。

インドは人口の 1%の富裕層が全体の富の 73%を占めているという調査結果がある。しかしその 1%でも東京都の人口よりも多いから、物事を日本の感覚で捉えてはいけない。

私たちが最初に泊まったホテルは超高級ホテルで、円柱形の建物で中央にドーム状の屋根を持ち、吹き抜けの大きな中庭になっており、中庭といっても屋内なのでエアコンも効いている。

ホテルに入るのに X 線の手荷物検査があり、これも驚きだ。

ロビーにいる客たちは外国人と 1%と言われるインド人富裕層らしい。先ほどまで街で見えてきた人々と完全に違う雰囲気をしている。



【ホテルの中庭 下から撮影】



【ホテルの中庭 上から撮影】

第三章 歴史を旅する

■インドの歴史をたどる

インドの歴史はインダス文明まで遡る。しかしその場所は現在のパキスタンが主で、この文明は謎が多く文字の解読もされておらず、いつの間にか消滅した。

インド各地は様々な部族、民族、宗教が各地で対立を繰り返し、混沌とした時代が続き、一時的に有名なアショーカ王が統一したが、彼の死後は再びバラバラになった。

その混沌とした状態が何となくまとまり始めたのが 13 世紀で、北インドはデリーを中心にイスラム王朝が相次いで建国され、南インドはヒンズー教の諸王朝が栄枯盛衰をくり返した。

今回の旅は、北インドのゴールドトライアングルと呼ばれるデリー、ジャイプール、アグラの 3 都市を巡るもので、そこにある歴史的建造物を時代に沿ってたどってみる。

■クトゥブ・ミナール

13 世紀に出来たというデリーにある世界遺産「クトゥブ・ミナール」にやって来た。ミナールとは、モスクに隣接したミナレット（尖塔）のことで、高さが 72.5m ありインド最古だという。

インド最古の理由は、インドで初めてイスラム教勢力がヒンズー教勢力を破り、その権力を誇示するために高い塔を造ったからで、隣にある廃墟になったモスクは元々あったヒンズー教の寺院を流用したためヒンズー様式とイスラム様式が混在している。

同じ敷地にミナレットの土台部分だけの「アライ・ミナール」という建造物がある。直径 25m もあり、完成していればクトゥブ・ミナールを遥かに超える塔になっていたはずだが、土台部分が完成した時に王が暗殺されて工事が中断した。



【高さ 72.5m のクトゥブ・ミナール】



【廃墟になったモスク】



【土台部分だけのアライ・ミナール】

工事が継続されなかったことは、その政策が家臣や民に支持されていなかったことを意味している。未完成の土台はその証拠になり、暗殺された王はその不人気ぶりを 800 年以上も世間の目にさらされ続けてきた。しかしそんなことは彼が知る由もない。

■フマユーン廟

1526 年、イスラム教のムガル帝国がインド全土を統一した。そしてそのムガルの語源がモンゴルだというから、チンギスハンの末裔が多様性をバラバラのまま包み込んだことになる。

ムガル帝国第 2 代皇帝フマユーンの墓「フマユーン廟」がデリーにある。赤砂岩でできているので全体的に赤く、ドームは大理石で白っぽい。どの方向から見ても左右対称のシンメトリー構造をしており、世界遺産になっている。



【フマユーン廟 正面】

フマユーンは 1540 年に戦争で大敗しペルシアに亡命した。やがてペルシアの支援を受け、1555 年に復帰したが、翌年に事故で亡くなった。ペルシア出身の王妃が、亡き夫のために廟を建築した。

庭園はペルシア様式で、正方形の庭園を 4 つの区画に分けるので四分庭園と呼ばれている。この建築様式はムガル帝国の廟の原型になり、後のタージマハルに影響する。



【フマユーン廟の内部 中央は墓石】

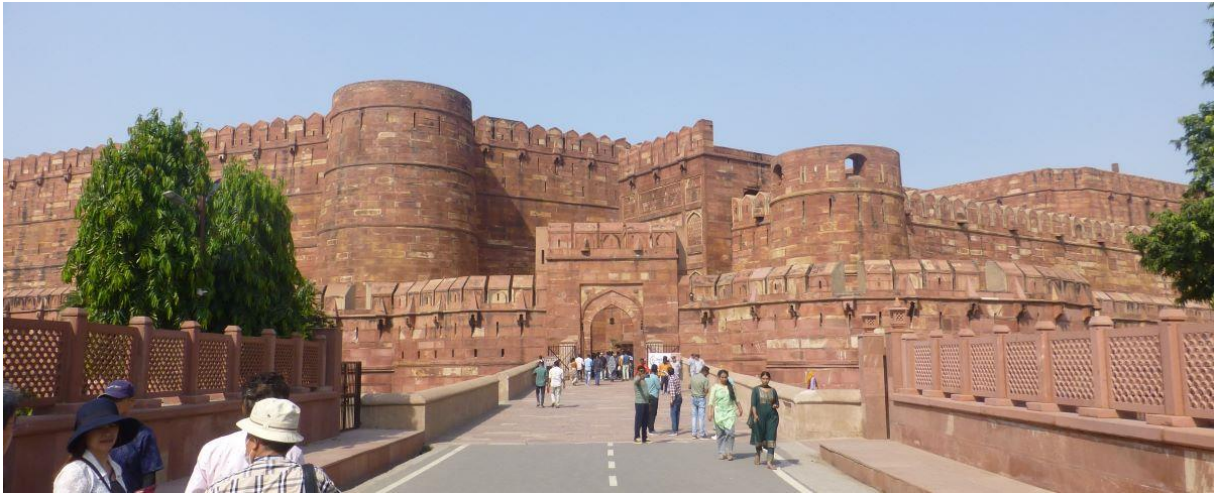
この廟は私が思っていたものよりかなり大きい。そして美しい。私はインドという国の得体の知れない底力のようなものを感じた。

■アグラ城

デリーから南東に約 200km、かつての首都でアグラという人口 160 万人の都市がある。ここにムガル帝国第 3 代皇帝アクバルが完成させた世界遺産の「アグラ城」がある。

赤砂岩で築かれており赤い城とも呼ばれ、城壁の総延長は約 3km もあり、とにかく広い。城内の宮殿部分には白大理石が多用されており、今でも昔の栄華が色濃く残っている。

私が今まで世界各地で見てきた城の中で最大規模の城だろう。



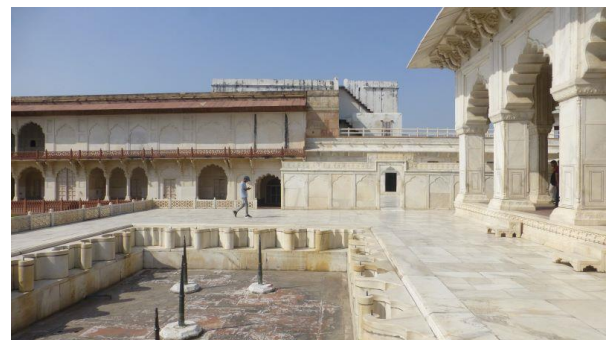
【アグラ城の城門正面】



【アグラ城の中庭】



【アグラ城内部 宮殿入口】



【アグラ城内部 噴水跡】

■ファターブルスィークリー

アグラの西約 40km、台地の上に建設された世界遺産の宮殿都市「ファターブルスィークリー」がある。ここも赤砂岩で造られているので全体的に赤茶色をしている。宮廷地区とモスク地区とがあるが、モスク地区には立ち寄らず宮廷地区のみを訪れた。

この都市もムガル帝国第 3 代皇帝アクバルによって建設され、一時的ながらムガル帝国の首都になった。アクバルは子供に恵まれなかったが、この地に住むイスラム教の聖者の予言で王子が誕生した。それゆえここに新たな都を造り遷都した。しかし猛暑と水不足のために 14 年間しか使用されず、廃墟となった。

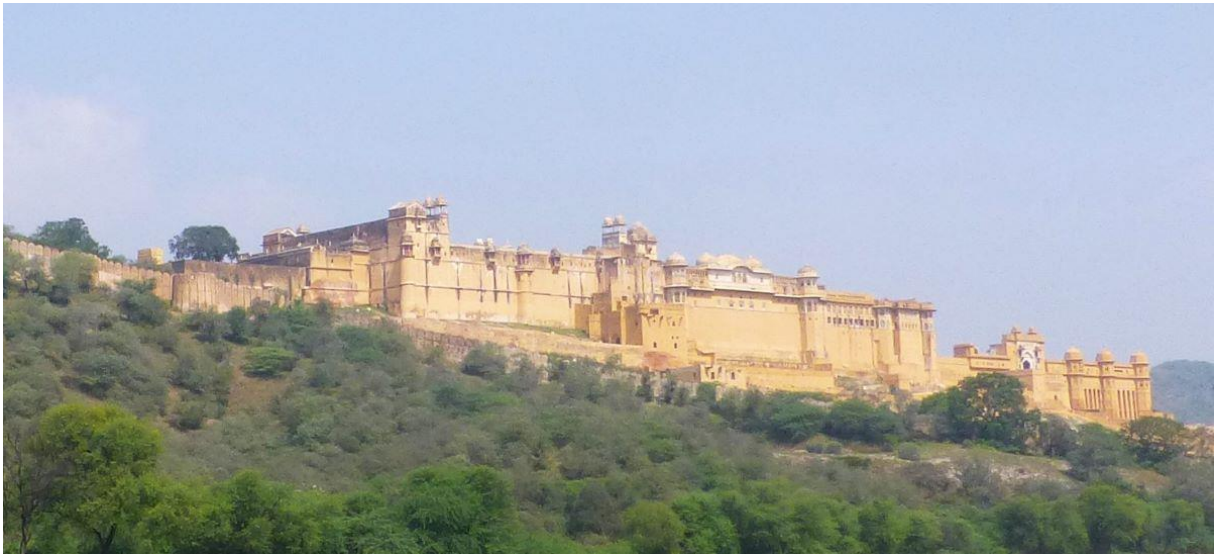
しかし水や暑さは遷都前に分かっていたはずだが、跡継ぎ問題は権力者の判断を狂わせてしまう。どこかの世襲国家もひどいが、日本の政治家も 2 世、3 世ばかりで子供可愛さのあまり間違った判断をしないことを願うばかりだ。



【ファターブルスィークリーの宮廷地区】

■アンベール城

デリーから南西に約 280km にジャイプールという都市がある。その郊外にラージプート族の城、世界遺産の「アンベール城」がある。



【アンベール城の外観】

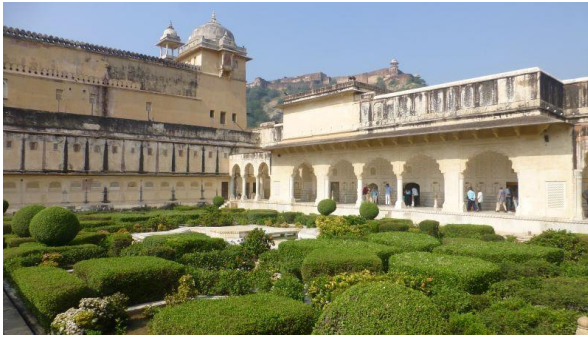
城は小高い山の上であり、バスでは行けないのでジープに乗り換える。ジープにはホロが付いているので直射日光は避けられが、砂煙と排気ガスと家畜の臭いはかなり強烈だ。

城門の手前でジープを降りるとものすごい数の物売りが近寄ってくる。非常にしつこく、まとわりついてくる。そのしつこさは私の旅行人生でも過去最高と言っていいかもしれない。

たどり着いた城は、見事としか言いようのない造りをしており、山の上なので存在感がある。周囲の山の稜線には城壁のような建造物があって、そこだけを見ると中国の万里の長城に似ている。



【アンベール城の城門を入ってすぐの広場】



【城の内部 中庭】



【見事な天井の装飾】

この城は戦のための要塞という側面と、王と12人の王妃のための宮殿という側面を有しており、強固かつ壮大でありながら豪華絢爛な造りになっている。キラキラ輝くガラスを散りばめた天井の装飾も見事で保存状態も良い。

2階部分は王が暮らす住居スペースで、12人の妻は1階にある12部屋に分かれて暮らしていた。王の住む2階から1階の各部屋に降りるために12の別々の階段がある。つまり王は、今夜はどの妻の部屋に行こうかを決めて、12のうちの1つの階段から降りて行くという仕掛けだ。

王と王妃との優雅な生活にあやかっただけか、綺麗なインド女性モデルがプロのカメラマンと撮影に来ている。あまりに綺麗なので私は思わずシャッターを切った。

美人モデルを見ながら、おそらく美人ぞろいの妃たちに囲まれた王の生活、酒池肉林の生活を想像してしまうのは私だけではないだろう。



【1階に降りるいくつかの階段 降りた所に入口がある】



【美人モデル】

ムガル帝国は連合国家のような形態だったらしく皇帝アクバルはヒンズー教のアンベール王国から妃を迎え、イスラム教とヒンズー教の融和を図った。統治機構を確立し、国の財政を安定させて諸外国との交易も盛んにした。宗教対立が無くなれば繁栄するということだろう。

そんな中、この城はアンベール王国の王が1592年から築城を始めて、100年以上も増改築を続けた。その試行錯誤の末に先ほどの12の階段の構造になったのだろうか。

■ タージマハル

アグラ城の東 2km のヤムナー川沿いに有名な「タージマハル」がある。もちろん世界遺産でインド観光の最大の目玉になっている。

タージマハルは宮殿でも寺院でもなくムガル帝国第 5 代皇帝シャー・ジャハーンが王妃ムムターズ・マハルのため建設した廟で、1631 年に病死した妻のために翌年より着工し 22 年かけて完成させた。ムガル帝国最盛期の最高傑作で、インド・イスラム文化の代表的建築でもある。



【正面から見たタージマハルの廟とミナレット 左右にモスクと迎賓施設が見える】

タージマハルの敷地は南北 560m、東西 303m の長方形をしている。南側約 1/4 の部分に芝生の前庭があり、この前庭だけでも結構広い。その前庭を突き進んで行くと大きな門がある。この門も第一級の建造物で、この門から撮ったタージマハルの廟の写真がよく紹介される。



【タージマハルの門 門から写したタージマハルの廟】

門をくぐって広がる庭園が一辺 296m の正方形で、水路と歩道によって庭園が東西南北に 4 分割されており、フマユーン廟と同じペルシア様式の四分庭園になっている。

その奥に廟の基壇があつて、中央にドームを冠した立派な廟がある。基壇の四隅には高さ 42m のミナレットが立っている。ディーブさんの説明によるとミナレットは少し外側に傾いており、これは地震があつた時に廟の側に倒れないという配慮だという。

そう言われて見ると、確かに少し外側に傾いている。写真に撮るとレンズの曲面の作用でむしろ内側に傾いて見えるから、これは実際に現地で本物を見ないと分からない。

基壇を左右から囲むように西側にモスク、東側に迎賓施設がある。この 2 つの建物は役割こそ違ふが、完全に同じ形をしており、ここでもシンメトリー構造を保っている。

基壇の上に建つ廟は一辺 57m の正方形の四隅を切り取った八角形をしている。基壇と廟と 4 本のミナレットは白大理石できており、築 400 年近く経つのにその白さと輝きを失っていない。



【基壇に建つ廟とミナレット 左にモスクが見える】

廟のドームの屋根は 57m あるが内部に入ると天井は 24m しかない。これは屋根と天井の間に空洞があるためで、死者の魂が休む廟では低い天井の方が良いという発想らしい。

廟内部の八角形のホールを中心にムムターズ・マハルの白い大理石の墓石があり、その左横に夫のシャー・ジャハーンの墓石が置かれている。



【廟内部中央のムムターズ・マハルの墓石】



【東側にある迎賓施設】

廟を出て振り返って門をみると、また違う景色が広がっていて四分庭園もはっきり見える。

タージマハルは、もとにかく“素晴らしい”の一語に尽きる。その圧倒的存在感で足がすくむ思いがする。私がこれまで見てきた寺院や教会や廟で、これほどの感動を覚えた施設は記憶にない。私の旅行人生でもピカイチのものだろう。

同じツアーの1人参加の女性が“感動”を連呼している。彼女は日本の友人たちにその感動をテレビ電話でリアルタイムに伝えている。これも凄いことをしているが、感動を誰かと分かち合いたかったのだろう。



【廟から門を観た景色】

タージマハルの北側はヤムナー川が流れており、対岸には広いが、少し荒れた土地がある。実はここに夫シャー・ジャハーンが自分の廟を建てるはずだった。ところが息子の第6代皇帝との折り合いがつかずに夢の計画となった。それだけでなく隠居したシャー・ジャハーンはアグラ城に幽閉され、アグラ城からこのタージマハルを見て晩年を過ごしたという。

それでもタージマハルが既に完成していたことは幸運だった。工事途中だったらどこかの塔(アライ・ミナール)のようになって、後世の者から何を言われるか分からない。



【アグラ城からタージマハルを望む】

■イギリス統治

その後は徐々にムガル帝国が衰えて、18世紀になると西欧列強が揃ってインドに進出してくる。最終的にはイギリスが東インド会社によって経済的にインドを支配するようになった。

経済的とはいえ支配される側のインド人は徐々にイギリスに対する反感を高め、1857年にセポイの反乱が勃発した。これを鎮圧したイギリスはムガル皇帝を廃し、イギリスの直接統治へと切り替え、イギリスから提督を送り込み完全植民地にした。

この頃の日本は江戸幕府末期で、このインドやアヘン戦争で敗れた中国の惨状を見て明治維新へと向かう。その後の日本は富国強兵と殖産興業を国是にした国を造っていく。

■ピンク・シティ

人口 300 万人のジャイプールには城壁に囲まれた旧市街地がある。7つの門で出入りするこの旧市街が「ピンク・シティ」と呼ばれており、全ての建物はピンク色に塗られている。

ピンク色に塗られた理由は、1876年にイギリスの王子がジャイプールを訪れることになり、その王子の好きな色がピンク色だったから歓迎するために街中をピンク色に塗った。これによって王子一行が大満足したので後世に受け継がれることになった。

街の中心地にある「風の宮殿」と呼ばれる建物があり、正面から見ると大きいですが、奥行きはほとんどないという珍しい形をしている。

この建物はかつてこの街を治めていたラージプート族の王によって建てられた。5階建てで表通りに面して953の小窓がある。この小窓から宮廷の女性たちは街の様子を見ていたという。



【ピンク・シティの城壁と門】



【風の宮殿】

■イギリスに翻弄され続ける

インド国民のイギリスに対する感情は決して良好なものだけでなく、徐々に民族運動が高まり始め、反イギリス運動に展開していった。

これに対応すべくイギリスはあたかも自治権を与えるようなポーズをとるために有力ヒンズー教徒を中心とする穏健な人々の集まりの諮問機関「インド国民会議派」を発足させた。

しかし、独立機運はさらに高まっていった。

そしてイギリスの次の一手がとんでもなかった。それはインドが独立した場合に人口が少ないために苦しい立場に置かれると思われるイスラム教徒を味方に付けようと、親イギリス組織として「全インド・ムスリム連盟」を発足させた。

敵の敵は味方という考え方はいつの世でも存在するが、あまりにもえげつない。

そうこうしているうちにヨーロッパでは第一次世界大戦が勃発し、インドは軍事物資や兵力の供給元になり、その見返りは将来の自治の約束だった。これを信じた“インド独立の父”と呼ばれたガンジーはイギリスへの協力を人々に促した。

しかし戦争が終わっても約束は果たされず、ガンジーは不服従運動を展開するようになった。

そして第二次世界大戦ではインドの一部急進派勢力は日本の援助でインド国民軍を結成し、独立を目指した。しかし日本軍のインパール作戦失敗などで独立は果たされなかった。

■独立

第二次世界大戦後、イギリスの衰退と時代の流れもあってインドの独立が認められた。

ただしインド国民会議派と全インド・ムスリム連盟の対立は収拾されず、1947年にヒンズー教徒の多いインドとイスラム教徒の多いパキスタンは分離独立に至った。イスラム教との融和を目指すガンジーは最後まで分離に反対したが、1948年に暗殺された。犯人はヒンズー教徒だった。

その後のインドは東西冷戦時代にはどちらの陣営にも属さず、政治は民主主義、経済は社会主義を推進した。

この独自路線とバランス感覚は“多様性をそのまま包み込む”インドならではのものだろう。

1974年、インドは核実験を成功させて世界で6番目の核保有国となった。

現在のインドはGDP世界第5位、3年後には日本を抜いて世界第3位になろうとしている。イギリスに翻弄されたが、英語が共通語として残ったことが発展の礎になったのかもしれない。

第四章 インドあれこれ

■ガイドの話

バスの中でガイドのディープさんが色々なインド事情を説明してくれるのでメモをとった。

現在のインドでも実質的にカースト制度が残っており、そのため同じ身分の人同士が結婚するように両家の親が決める見合い結婚が多いという。従ってあまり離婚しないと言っている。

国民が信仰する宗教の割合はヒンズー教が約 80%、次いでイスラム教が約 15%、以下キリスト教、シーク教、仏教と続くという。

インドはヒンズー教徒だけの国かと私は思っていたが、実際にあちらこちらでイスラム教徒のお祭りや行進などを目にする。意外にイスラム教徒が多いことに驚く。

ディープさんは「多神教のヒンズー教は全ての宗教の根幹という思想なので、他の宗教はヒンズー教の一部だ」と言っている。さすが何もかも包み込むという国らしい。

インド憲法ではヒンズー語と英語を共通語としており、その他に 22 の指定言語を定めている。インド紙幣には 15 の言語で金額が記されているから、多民族国家ぶりがよく分かる。

その多民族のインドに面白いことわざがある。「15 マイルごとに方言が変わり、25 マイルごとにカレーの味が変わる。100 マイル行けば言葉が変わる」という。1 マイルは 1.6km だから、広い国土のインドはどれほど多様なのか。

インドといえば数学の国、数字の 0（ゼロ）を生み出したことでも有名で、その流れから大学は IT エンジニア系の学部が医学部より難しい。そのため卒業後の賃金も医者よりも IT エンジニアの方が高いというから日本では信じがたいことになっている。

■インドの首都

私はインドの首都はニューデリーと記憶していた。しかし今回 VISA の申請で、その認識を新たにしないといけないことが分かった。その理由は申請書に書く宿泊するホテルの住所が NEWDELHI DELHI になっており、これだとホテルはデリーの中のニューデリーにあることになる。そんな疑問を持っていろいろ調べると以下のことが判明した。

- ・デリーはインド政府直轄の都市でどの州にも属していない。
- ・デリーの中にオールドデリー地区、ニューデリー地区、軍事地区の 3 区がある。
- ・ニューデリー地区に政府機関が集中している。
- ・最近ではデリーを首都とする地図も多く出回っている。
- ・インド政府はニューデリーを首都と明記している。

結論としてデリーを首都と言っても間違いではない。むしろインド政府がニューデリーを首都としていることが問題で、日本に例えれば皇居と官庁がある千代田区を首都と呼ぶようなものだ。

■インドの物価

インドの物価はつかみどころがない。外国人旅行者には元々高い値付けだが、物価高騰や円安もあって為替レートもここ数年かなり変化している。今回の旅では 1 ルピーを約 2 円で両替した。

タージマハルの入場料はインド人が 100 円、外国人は 2200 円とかなり差がある。食事の時の飲み物はビールの小瓶が 1000 円、ソフトドリンクも 800 円と結構高い。あるレストランで昼食の勘定を払い終わったディープさんに値段を聞いたら、1 人 7000 円と教えてくれた。

外国人向けではなく、一般のインド人が買う物の値段を知りたくて、地元の人が出入りする商店に入った。缶ビールのロング缶が 260 円、マンゴージュースは 120 円だった。

デリー郊外には最近分譲した高層マンションが建ち並んでいる。ディーブさん情報では購入額は 3LDK で 1500 万円～2000 万円という。

インド国民の平均年収は 200 万円弱だということから、日本の半分程度が物価の実態かもしれない。

■ジャンタルマンタル天文台

インドは数学と天文学が盛んだったので、ジャイプールには世界遺産「ジャンタルマンタル天文台」がある。1728 年にできた天文台で日時計などの観測義が 20 くらいある。

石でできた大きな日時計は 1 分単位で時刻が分かり、私の電波時計と同じ時間を示している。

太陽の位置から星座を計測できる半球体があり、占星術も研究された。

ディーブさんがその研究をしているという先生を名乗る男性を連れて来た。天文台の説明の後に無料で占星術を使って占ってくれるというから彼の周りには女性陣が集まり、盛り上がっている。占いでは「あなたは青い石が重要」、「あなたは緑色の石が運気を高める」などと言っている。

そして偶然にもその後に宝石研磨店に立ち寄る行程が組まれている。

これは実に巧妙だ。それに気付いたのは私だけでないだろう。



【日時計】

■アーユルヴェーダ

インドでは 5000 年昔から研究されてきた医学「アーユルヴェーダ」が有名だ。

瞑想やヨガ、マッサージ、呼吸法、食事療法などあり、病気になってから投薬や手術をするのではなく日常生活で健康体を作るという考え方で、漢方薬にも通じるものがある。

そのオイルマッサージ体験ができるというので、私と妻と数人のツアー客が申し込んだ。

何となく薄暗いホテルの一室に通された私は、体格の良い 40 才くらいの男性マッサージ師に身を任せてパンツ 1 枚でベッドの上に横になった。

まずは全身マッサージ、その後に薬草の入った秘伝のオイルを体に塗り再度全身マッサージが続く。結構な力を加えてくるので少し痛い。彼は片言の英語で「どうだ、快適か？」と聞いてくるので、私は多少の痛みがあるものの相槌を打つと、さらに強くなる。日本人は「良薬口に苦し」的な発想があるので、つつい我慢してしまう。それでも本当に痛いアクションをすると笑って力を緩めてくれる。このせめぎ合いがなかなか面白い。

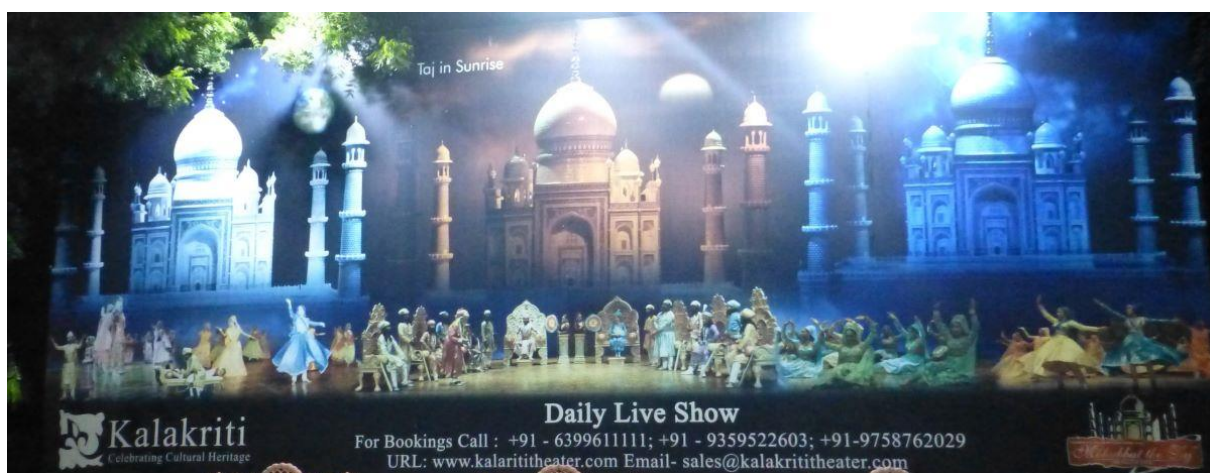
最後は仰向けに寝た私の額の眉間の上に温かい秘伝のオイルを垂らし始める。それはまるで儀式のようでこの時間が長い。そして何やら気持ちいい。眉間の上はヒンズー教徒の既婚女性がつけるビンディーや聖職者がつけるティラカにも共通しており、いかにもインドらしい。

約1時間、私のアーユルヴェーダ初体験が終わる。他のツアー客から感想を問われ、私は「眉間の上のオイルが効いて、不思議な爽快感が残っていますね」と答えた。

■ライブショー

タージマハル近くの劇場でライブショーを観た。歌と踊りのミュージカルで、王と妃の愛の物語に始まり、妃が病死して王が悲しみ、その思いを形にしたタージマハルが登場して終わる。

実に単純明快で、水戸黄門のようにストーリーが分かっているけど面白い。いや、水戸黄門は起承転結があるが、このショーにはそれもない。ただただ歌と踊りと華やかな衣装、そしてタージマハルを見せることが全てのように、何の屈託もなく観ることができた。



【ライブショー会場前の看板】

■カレー漬けの日々

今回のツアーは全食付きで、安全面や衛生面からホテルのレストランで食べるが多かった。食事のほとんどはビュッフェスタイルで、料理はもちろんカレーが主体で、そのバリエーションも豊富だ。

あるレストランではカレーが入った壺がたくさん並んでおり、客たちは何種類ものカレーを小皿によそっていた。その何種類ものカレーをインディカ米のライスにかけて混ぜて食べる。ここでも“多様性をバラバラなまま包みこむ”を体験する。



【カレーが入った壺】



【盛り付けたカレー】

本場インドのカレーはもっと辛いものかと思っていたが、意外に辛さは控えてある。いや、正確に言えば何種類もあるカレーのうち1つか2つは辛い、それ以外はさして辛い。

味は美味しい。しかし日本のカレーとは似て非なるものという気がする。

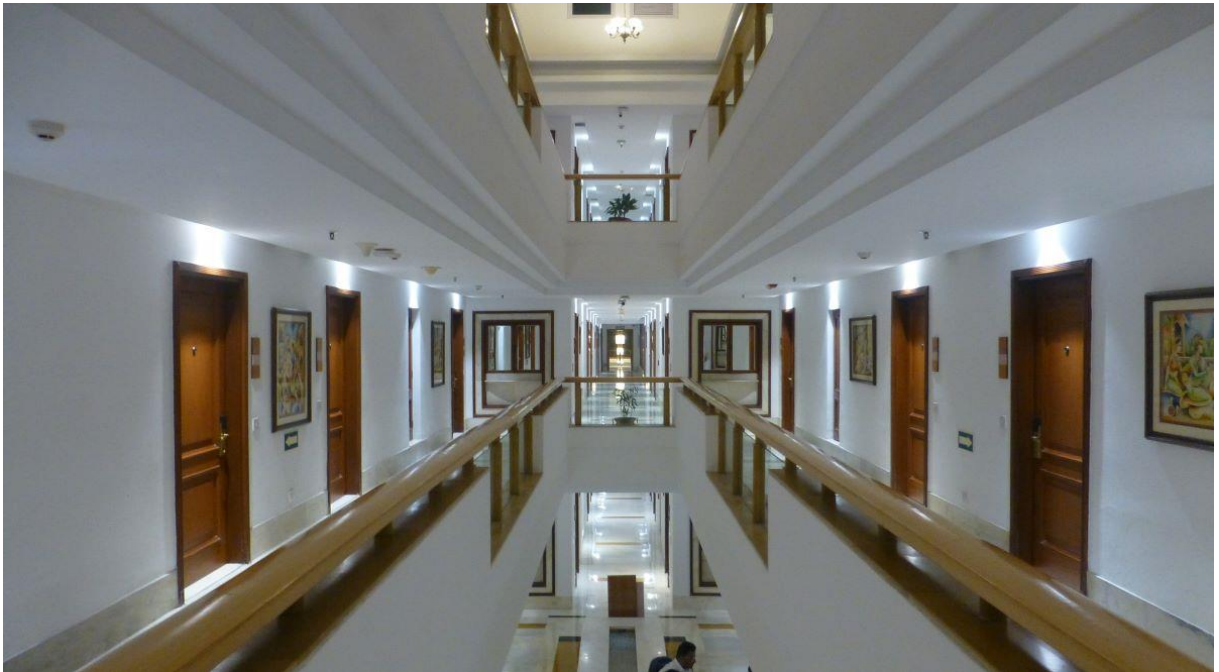
そういえば日本のカレーハウス COCO 壺番屋がインドに進出して話題になったが、インド人がそのカレーを食べた感想を「確かに美味しいが、これはカレーではない」という主旨の発言をしていたことを思い出した。

ツアー客の中には日本から持ち込んだインスタント麺を部屋で食べる人もいたが、私はせっかくインドに来たのだから朝昼晩と毎日カレー漬けの日々を送った。

■高級リゾートホテル

最後の宿泊はタージマハルの近くの高級リゾートホテルに泊まった。広大な敷地で四分庭園を模した庭と噴水、3階建ての白い建物など、タージマハルを意識した施設になっている。

その中で特に驚いたのは部屋に行くまでの廊下が3階吹き抜けで、私はこんな廊下は経験したことがない。



【1階から3階吹き抜けの廊下 2階の廊下から撮影】

翌朝、ベランダに来た小鳥のさえずりで目が覚めた。

数日前にインドに来た時は喧噪の世界に驚いていたが、今は静かな朝を迎えている。それはまるで別世界、無の空間といったところで、さすが0（ゼロ）を生んだ国だと思い、これもまたインドの多様性なのかと改めて感心する。

そして私は再び「多様性をバラバラなまま包みこむ」という言葉を思い出した。

第五章 旅の記録

■旅の記録

実施は2023年9月25日（月）～10月1日（日）の6泊7日の行程を示す。

- ・1日目 6時自宅を出て相鉄線に乗り横浜駅で京急線に乗り換え、ドアが閉まる直前に忘れ物に気付き、搜索、回収し、8時15分羽田空港第三ターミナル到着
羽田空港10時15分発ANA便で9時間10分のフライト、
現地時間15時55分インドIGI国際空港着、チャーターバスでホテルに移動
ホテル「RADISSON BLU HOTEL NEW DELHI DWARKA」にチェックイン
- ・2日目 8時ホテルを出発し、世界遺産の宗教施設「クトゥブ・ミナール」、
世界遺産の「フマエーン廟」を見物、クレジゼーズホテルのレストラン「タバ」
でインド料理の昼食、ジャイプールに移動
ジャイプールのホテル「RAMADA HOTEL」にチェックイン
- ・3日目 8時30分ホテル出発、「湖の宮殿」を車窓見物、世界遺産「アンベール城」の
近くでバスを降りてジープに乗り換えて城門で降り、アンベール城内見物
インド綿店に立ち寄り、レストラン「スパイスコート」で昼食
旧市街「ピンクシデイ」を散策し、「風の宮殿」の前を歩き、
世界遺産「ジャンタルマンタル天文台」見物し、16時ホテル着（連泊）
- ・4日目 7時30分ホテル出発、アグラへ向い、昼食はアグラのレストラン
世界遺産「タージマハル」見物、ホテル「JAYPEE PALACE」チェックイン
インドマッサージの「アーユルヴェーダ」体験、夕食はホテルのレストラン
- ・5日間 8時30分ホテル出発、世界遺産の宮殿都市「ファターブルシークリー」見物、
昼食はホテルに戻り中華料理、世界遺産「アグラ城」見物、16時ホテル着、
その後「カラクリティ文化・コンベンションセンター」でライブショー観劇
20時にホテルに戻り、ホテル内のレストランで夕食（ホテル連泊）
- ・6日目 8時ホテル出発、デリーに向い、ヴァサント・コンチネンタル・ホテルで昼食
15時IGI国際空港到着、18時羽田空港に向けANA便で出発
- ・7日目 約8時間のフライトを経て日本時間朝5時羽田空港に到着

2人の総費用は約44万円、1人当たり約22万円で詳細を以下に記す。

- ・阪急交通社への払い込み（2人分）395342円
 - 基本旅費は 159900円/人
 - サーチャージ税金など 37771円/人
- ・現地オプションツアー（2人分）32000円
 - アーユルヴェーダ 9000円/人
 - ミュージカルショー 7000円/人
- ・国内交通費（2人分） 約2000円
- ・食事の飲み物と土産物（2人分） 約10000円